連続セミナー
「FD ワークショップ」2

ことばにつばさを
ドラマクラスと教育の身体アプローチ

法学部教授 横山千晶

教育効果向上のためのさまざまな手段を検討し紹介していくFDワークショップ。今回は横山千晶さんによって、英語の授業にドラマを取り入れたやり方が紹介され、学生による実技も行われた(2004年12月20日来往舎シンポジウムスペースにて、司会・鈴村直樹)。

前半では、横山さんより最近の大学における英語教育のあり方全般について、大局的な見地も交えた講演があった。

横山さんがドラマを用いている授業は法学部設置の「英語インテンシヴ」と外国語教育研究センター設置の「英語ドラマ」クラスである。まず強調されたのは、この授業はあくまでも「英語のクラス」であるということ。演劇の手ほどきは目的とされていない。ドラマを作るという実体験を通して、英語を教えることが、この授業の本義である。以下は横山さんの講演の要旨。

言語教育の現状

このやり方で授業を行うのは、慶應では2年目となる。そもそも文部科学省のトップ30に対する重点補助案にのっとって、私立大学でも目に見える研究および教育効果が期待されている。文科省や企業側からは、語学教育、特に英語教育に対して強い関心が向けられ、ラボ、TESOL、CALなどの形態が諸大学で次々と積極的に取り入れられている。

こうした中で、本当に憂慮されるのは、日本語による表現能力の低下である。電子メール、携帯メールでやり取りされる言葉では、表現の分断化が加速していく。名詞で終わる文、箇条書きといった形が増え、整った文の連鎖による叙述はあまり行われない。そして気遣いの表現が肥大し、他者との間にクッションを何重にも敷こうとする。

このようなことが起きる一因は、学校教育にもあると思われる。身体表現から切り離された、座学中心の教え方によって、偏った言語感覚を生徒・学生に植えつけてしまっているのではないか。その点、慶應に自然科学系の実験の授業があるのはよいことである。

身体の実感から離れた言語感覚は、英語を初めとする語学の授業の形によっても助長されている恐れがある。メールやコンピュータといったメディアが媒介することによって、関係性がヴァーチャルになり、距離感が希薄化していく。身体の関与する余地は減っていくばかりである。また、昨今はパワーポイントの活用が広まっているが、これなども、体を使った指導という要素が排除されているという見方もできる。つまりは、教室という場への機械の介入が押しとどめ難く進行し、(パソコンの類の扱いに不慣れな者であればなおさらのこと)授業が機械に乗っ取られつつあるのではないかという危機感を否めないのである。

また、授業は教室という「箱」で行われることが当たり前になっているが、これにも束縛を感じざるを得ない。固定化されたボードや判で押したように並べられた机。これでは授業の行い方もどうしても画一的になってしまう。フリーなスペース、場合によっては机も椅子もすっかり取っ払うといったような使い方にも対応できるような、柔軟性あるスペースが求められる。だがそうしたアイディアは、要望を出してもなかなか受け入れられないという現実があり、そのためにキャンパス内、施設内の空いている空間でゲリラ的に授業を行うといった行動に打って出ることもある。

大学での英語の授業はどうあるべきか。文法については、高校までで十分に会得しているはずである。大学においては、教養としての英語を重視したい。巷間では「授業では英会話が楽しい、訳読はただつまらない」といった声ばかりが跋扈しているが、これはマスコミが作った薄っぺらなイメージに過ぎない。むしろ、発信・受信や、TOFEL・TOEIC、プレースメント・テスト、アチーヴメント・テストといった状況、必要性に合わせて、テクニックをカテゴリー化することが必要なのではないか。また学部の上級学年や大学院までも続くような語学授業の要望もあり、視野に入れるべきであろう。そして、専門性のある人を巻き込んだ授業の開発、文化としての英語といったとらえ方による授業というものも考えていくべきである。

ドラマの導入

1997年から4年間、新潟の長岡市においてドラマを作るという試みを行ってきた。これは長岡市のプロジェクトで、オックスフォード・シェイクスピア・カンパニーの監督を招聘してドラマを作る中で、コミュニケーションを図るという試みであり、初年度から大きな成功を収めた。年ごとに変質を余儀なくされたが、それでも、参加者は登場人物に同化して英語の台詞を急速に吸収していき、目を見張るものがあった。そこで慶應でもこの手法を取り入れてみることにした。

講演に続いて、ドラマを導入した英語クラスの学生たちを交えた質疑応答があった。

Q： 履修学年は?

A： 法学部の授業は原則2年生だが、1・2年とも履修可能。外国語教育研究センター設置の授業は制限なし。

Q： 授業を履修した理由は?（学生に対する質問）

A1： 演劇そのものが好きだったからだが、結果として英語を通して自己表現できるようになり、「tool としての英語」ではない方法で読み書きを体得できた。

A2： もともと演劇に興味はなかったが、英語の必要性は感じていた。授業タイプがいままでにないものだったことに惹かれて履修したが、結果として座学では学べない英語が身についた。

A3： 演劇にはもともと興味はなかったが、英語は好きだった。そのほかに、みんなと一緒にひとつのものを作り上げるプロセスが好き。

A4： 高校時代に演劇をやっていたが、英語で演劇をすることまでは考えていなかった。途中、スクリプト以外の英語を話せないという悩みや、演出部分は日本語で議論していいのかという疑問を感じることもあったが、結果的に英語と接する能力が格段に上がったと思う。また、先輩や自分よりも英語の上手い人と毎週接することができる点がよい。

Q： 体を使って表現することの利点は?

A1： 英語の扱いを身体で感じることができる。自分の力で英語に息吹を与えられるような感覚を抱く。また、役に入っていくことによって、英語そのものが身につくほかに、英語を通して心が身につくように思う。

A2： 大きく感情が動くことで、心がすっきりする。ストレス

「FD ワークショップ」に参加して

鈴村直樹（経済学部）

大学のとき、英語の授業で Norman Mailer の *The Executioner's Song* を読んだ。20年も前のことである。内容はオーソドックスな訳読で、受講者は少なめだった。どう考えても読み終わるハズのない分厚い本を、たった一年の授業のために買う必要があるのか疑問だった。こちらがせっかく予習をしているのに、ちょっとエッチな表現が出てくるだけでその段落をまるごと飛ばすのはヤメテほしかった。先生の名前は忘れた。本も捨てた。成績は、言えない…。だが、私はこの授業が嫌いではなかった。むしろ、楽しみでさえあった。大学にはほとんど行かなかったが、この授業には出た。少なくとも生きた英語の面白さを知りたい、という気持ちがそのときの私にはあった。クラス全体にもどこか似たような雰囲気が漂っていた。よりによってなぜ Mailer だったのかはいまだに不明だが、とにかくそのときの私は意欲的だった。

横山先生のクラスにはいろいろな人がいる。高校時代から演劇に興味を持っていた人、演劇とは無縁な人生を歩んできた人。英語の発音が上手な人、苦手な人。人前に出ることが好きな人、引っ込み思案な人。しかし、彼らもまたおしなべて意欲的である。いったい彼らのモチベーションの高さはどこから来るのだろうか。台本の内容か、演技に求められる読みの深さか、演劇という身体活動そのものか、あるいは、先生のキャラクターか。

かつてチョムスキーは生成文法の言語教育への応用可能性を問われ、次のように答えている。いわく、「教える」という行為の99%は学生に教材への興味を抱かせることであり、教師側の方法論に委ねられる部分はわずか1%に過ぎない、と。これは一見、チョムスキーならではの極論にも聞こえるが、私はかなり当たっていると思う。学習とは本来、内的な欲求に基づくものである。ドラマを題材に選べばいつでも授業がうまくいくわけではない。Mailer を読めばみんなが満足するというものでもない。題材の選択は確かに重要だが、学ぶことそのものに意味を見出せなければ、学習者が得るものは何もない。

ワークショップでは私もシェークスピアを演じてみた。それも英語で。エッチなセリフも口にした。だからというわけではないが、楽しかった。学生と一緒に身体を動かして、学生と一緒にたくさん笑った。20年後の彼らはまだ自分のセリフを覚えているだろうか。先生の名前を覚えているだろうか。台本は、たぶん捨ててしまうだろう。ひょっとしたら先生の顔すら思い出せないかもしれない。しかし、この授業は彼らの記憶にきっと残る。自分が何を考え、何を演じ、そこから何を得たかを彼らは忘れない。あの Mailer の先生の授業のように。

がなくなるようにも思う。

A3：授業を通して人格が変わるほどの変化を受ける場合がある。また、それに相応する達成感がある。強烈に印象に残り、大学を卒業してもきっと覚えていると思う。共同作業はやった分だけフィードバックがある。

後半は実際のワークショップ。約10名の学生に教員も加わって、横山さんの指示のもと、体と声を使っての授業法の一端を体験した。

●まず仲間になること。輪になってゲームを行い、体でサインを伝え合う。リーダーがまずルールを説明するが、これがむずかしい。「zip or zap」（ボールを素早くパスするイメージで、左か右の人を掛け声と合図で指していく）、「ナンバリング」などの実技。「場」を作り、授業への集中を高める効果が大きい。

●シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』冒頭を演じる。敵対する二つの家の郎党が街頭で諍いを起こす場面。しかし学生はいきなり台本（英和対訳）を渡され、設定の説明はされないので、学生は状況と各人物の性格について自分で考える。そして推測したことに基づいて演じる。その際は、台詞にふさわしい発声はもちろん、仕草を適切に行うことも同じく重要である。

●そのひとつのやり方として、人物のフリーズした形（「タブロー」）をいくつも作らせる。多くの人物が、ある瞬間にどのような位置関係にあり、どちらを向いてどんな格好をしているか、これを活人画として表現する。これによって、参加者はドラマの状況を読み込んで身体で表現することを求められる。

学生は、質疑応答からすると、ドラマを手段とするやり方になじむのにかなり苦労したようだが、ワークショップにおける集中力と極めて熱心な打ち込み方、そしてシェイクスピアの原語の台詞をてらいなく意を込めて話す様子を見ると、ドラマを通して、英語による表現と文脈の理解という重要な能力を、まさに「身につけた」と思われた。

横山さんからは、反省点として、この手法は時間も労力もかかるために、大学生活の他の面に影響が出てしまうという危惧が指摘された。ドラマとは、広く捉えれば身体知のあり方のひとつであり、これを開発する方策は他にもさまざまにあり得るだろう。そうした可能性を捉えつつも、今回のワークショップでは、教員の献身的な熱意と、授業の意義と手法への確信があれば、ドラマというアプローチが、学生を彼らも思ってもみなかったほどに鼓舞することができることが、まざまざと示された。

（報告・高橋宣也）

慶應義塾大学教養研究センター Report No.8
調査・研究セクション（担当：高橋宣也／鈴村直樹）
2005年3月31日発行
代表者　横山千晶
〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL：045-563-1111（代表）
lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp
http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/